

前期の活動が終わります。子どもたちの日々を応援しながら日々の生活を送ってきたつもりでしたが、果たして、子どもたち、保護者の皆さんの期待に応えられたかどうかを振り返りながら考えています。

7月に行われた個人面談の記録を読みながら、子どもたち、そして保護者の皆さんの中に今の学校生活に何か物足りなさを感じているような方がいらっしゃるような印象を持つことができました。

私自身、学校全体のレベルを引き上げていくためにどのようにしたらよいかを教員たちと一緒に考えてきたつもりでした。適切な表現ではないかもしれませんが、「中間層の引き上げ」はこの学校の大きな課題の一つです。これは、小学校をよくすることだけでなく、中学校、高等学校へとつながる一貫教育を実りあるものとするために大切なことなのです。実際に卒業した子どもたちの現在の様子からも、そのことの大切さが明確になっています。

私がここで言う「中間層」の子たちとは、学校生活を自分なりに楽しみ、課題への取り組みなどにおいても特別な問題がないと思われる子たちで、教員から見ると比較的安心して見ていることができます。しかし、その安心がその子たちにとっては刺激の少ない生活となっているのかもしれませんが。そして、このことが面談記録から私が感じたことにつながっているのではないのでしょうか。

学校に集まる子どもたちはそれぞれが個性を持ち寄り、皆自分らしさを大切にしながら生活しています。その持ち寄った個性がお互いの刺激となり、建学の心にある「火花を散らす」ことができます。そこには子ども同士の関わりと子どもと教師の関わりの方が望ましい形で存在することが求められます。

しかし、最近学校では、子ども同士の関わり方がうまくできず、そこに教師や親が関わらないといけないことがだんだんと多くなってきているのも事実です。そして、教員がそのようなことに関わることに要する時間は徐々に多くなる傾向にあります。このことが、教員が多くの子どもたちに声をかけてあげることができない原因の一つになってきていることは皆さんにもお分かりいただけるでしょう。

私は、教員たちに以下のように指示しました。

- 1 時間をかけた個別の指導が必要な場合は、それを他の子どもたちの生活への影響の少ない時間に行うようにする。
- 2 授業中に、特定の子に何度かの声かけが必要な場合は、他の子たちの心を痛めることのないような声かけを心がける。

1, 2 どちらの場合も、授業参加継続が不可能と判断した場合は、学習の場を職員室などに移動させ、後刻個別指導をすること。

このような対応には程度の問題があり、個々の事例によって教員たち一人ひとりの判断に任されることとなりますが、子どもも教員も同じような気持ちで、よりよい学校生活を送れるような環境作りをしていくことが大切であることを共通の認識として持っていかなければならないと考えています。

保護者の皆さんのご理解がいただけることを願います。

【少しずつ成長】

校長室に来てくれる子どもたち。低学年の子たちは、折り紙で遊んだり、お絵かきをしたり、オルゴールや部屋に置いてあるものにふれたりしながら休み時間を過ごしています。中学年の子たちは、友だちとおしゃべりをしたり、静かに本を読んだりしている子もいます。高学年になると、先に部屋に来た理由を言う子がいます。「ちょっとおしゃべりをしに来ました」「何かお手伝いすることありますか」と言われると、なんと返事をしているか迷うこともあります。

明らかに、「ぼくに優しいことばをかけてください」と言いたいような表情を見せる子もいます。でも、自分ではそんなことは言いません。私が「どうかしましたか?」と言うとそこから話し始める子もときどきいます。

さて、6月ごろまでの3か月くらいでしょうか。1年生が遊んだあとの部屋は折り紙、折り紙の切れ端が机の上、机の下に散乱していることが何度もありました。子どもたちには「自分でできる片付けはしましょう」と声をかけていました。しかし、自分のことがきちんとできない子どもが、他の子が散らかしたものを片付けられるはずがありません。時間になると、自分が遊んでいた場所をもう一度振り返ってみることもなく教室に帰っていった子どもたちでした。そのうち、ようやく私の声を受け止めることができる子が表れてきました。そういう子が2人、3人と出てくるのが、他の10人を動かし、それぞれの意識を変えることにつながることがよく分かりました。

子どもには変わる力が備わっています。その力は、まわりの子どもたち、大人たちの支援によって身につくこともあります。自分自身への気付きによって変わることが最も大切です。一人ひとりの小さな歩み、小さな成長を応援していきましょう。